

科学的事実論と疑似科学の事 — 超心理学研究を例に —

木村 聡彦

今日、様々な科学が日常生活・社会生活に浸透し、その力が有用に使われている。その一方、〈うさんくさい科学〉が世に蔓延しているのも事実である。では、〈うさんくさい科学〉の事実はオカルトではないのか。加えて、〈科学〉とは一体何であるのか。〈科学〉と〈うさんくさい科学〉のを分かつ分水嶺はどこであるのか。そのような疑問が本研究の研究動機である。一見〈科学体系〉の様に振る舞っているものを正統科学と比して疑似科学という。本研究の目的は、疑似科学が主張している事実を科学的事実論と呼ばれる科学哲学諸理論の視点から検証し、科学を科学足らしめる/疑似科学を疑似科学足らしめるものは一体何であるかの考察を行うことである。

そのために、疑似科学と見做されている学問領域の一つである超心理学の論文を使い、それらの論文中で事実していると言われているものが、事実するかどうかを森田基準(実験・観測基準と理論的基準)によって検証した。具体的には、対象となる超心理学研究論文として、マクロ PK 発生メカニズム・特異能力者の生理心理的研究・非接触ヒーリングの物理機序の研究等多様な領域から計 5 編選定し、それぞれの原著者が措定(推論の前提としてとりあえず肯定された未だ証明されていない命題)する知覚できないものの事実を森田基準によって分類し整理した。

検証・分類・考察の結果、超心理学研究論文が措定する知覚できないものの事実は 4 つのパターンのいずれかに当てはまることが判明した。この 4 パターンのうち 3 パターンはどこかしらに実験・観測的或いは理論的基準に係る破綻が見られた上、3 パターンの内 1 パターンにはこの分類で判断しかねる現象が起こりその疑問を解決するには至らなかった。

〈科学的〉であることに足る基準をすべて満たすものは 1 パターンのみ見られ、その帰結を得た超心理学研究の措定する知覚できないものの事実も 1 つ見られた。しかし、その措定された事実は我々は普通〈科学的〉とは認めないものだった。

本研究を通して、疑似科学と呼ばれていた超心理学の事実について一応の結論を得た。超心理学研究論文が措定する知覚できないものの事実は 4 つのパターンに分類され、この分類を持ってその論文が科学か疑似科学かを見極めることはある程度有効であろう。しかし、この分類を持ってのみでは知覚できないものが〈科学的であり、ある〉のか〈疑似科学的であり、ない〉のか一義的に区別できないということも明らかになった。

(指導教員 横山 幹子)